

県単農道整備事業(ふるさと)小黒地区

—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

小黒南原遺跡

1997. 3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

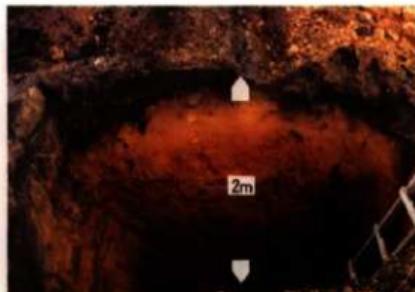
県単農道整備事業(ふるさと)小黒地区

－埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－

小 黒 南 原 遺 跡

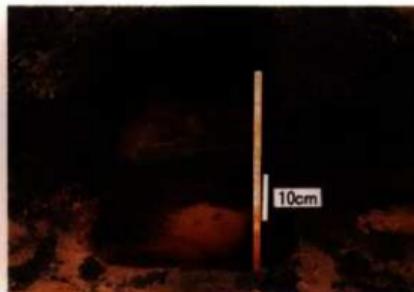
1997. 3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会



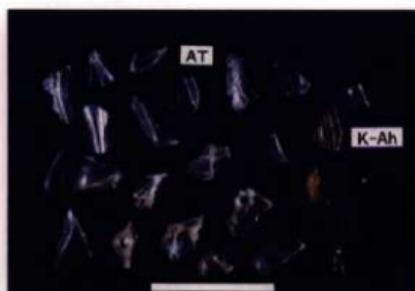
深さおよそ2mの試料採取用トレンチ

堆積物は上から、約30cmの黒土～黒褐色土、約40cmの軟質
黄褐色土、約2mの所々に赤褐色スコリアの点在する硬質褐
色土の順に堆積している。



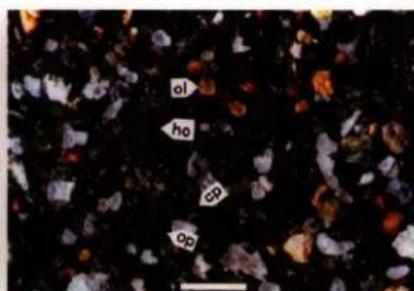
遺物産出地点近くの地層断面

黒土の下に黄褐色土が堆積している



深さ15cmから50cmに見られるバブル型火山ガラス

左側は九州の姶良カルデラから2.5万年前に飛来した姶良Tn
テフラ(AT)。右側のやや褐色に着色した6個のガラスは九州
の南の鬼界カルデラから7千年前に飛来した鬼界アカホヤテ
フラ(K-Ah)。白線は1mm



御岳小木曾テフラの鉱物

深さ90~100cmの赤褐色スコリアが点在する部分。opは斜方
輝石、cpは單斜輝石、hoは角閃石、olはカンラン石(以下同じ)。
hoとolの共存することが特徴の一つ。白線は1mm(以下同じ)



御岳磐川テフラの鉱物

深さ110~120cmの赤褐色スコリアが点在する部分。
斜方輝石、單斜輝石の他にカンラン石が見られる。
角閃石を欠くのが特徴の一つ。



御岳巣敷野テフラの鉱物

深さ180~210cmの赤褐色スコリアを含む部分。斜方輝石、
單斜輝石、角閃石、カンラン石の他に黒曜石やコクス状の
火山岩片を含む。この直下の御岳三岳テフラが約6万年前で
あることから、このテフラ降灰はおよそ5万年前と考えられ
る。

序

伊那市内には、先土器時代からの人々の暮しぶりを物語、実証してくれる遺跡がほんのわずか存在しています。とりわけ、今回の調査対象地区となった小黒南原遺跡周辺は通称小黒原台地と呼ばれ、伊那市を代表する遺跡密集地帯の一つに数えられています。これらの遺跡を通して、われわれの先人達が厳しい自然環境のなかで、よりよい生活を営むために様々な知恵と努力で地域社会を築いてきたことを知ることができます。

小黒原台地に初めて本格的な発掘調査のメスを入れたのは、昭和48年度中央道開通に伴う発掘調査の時がありました。さらに、畠地帯総合土地改良事業（伊那西部地区）を導入するに当たり、何回にもわたって発掘調査が実施され、多くの遺構・遺物が発見されました。

このたび、この地域に県単農道整備事業（ふるさと）が実施されることになり、事業に伴う緊急発掘調査を実施し、その成果を記録したのが本書であります。

本調査は平成8年9月から11月にかけて行われました。限定された道路幅の調査だったために当初、期待していた程の成果はあがりませんでしたが、ただ、1点ではあるが、先土器時代の尖頭器が出土したことは興味深いものといえます。また、今後、先土器時代を研究するうえでも貴重な資料となるものと期待しております。

発掘調査に当たっては長野県教育委員会文化財保護課、上伊那地方事務所土地改良課をはじめとする諸機関及び関係者の皆様に多大な御協力をいただきました。ここに厚く感謝の意を表する次第であります。

本書が、郷土史研究や埋蔵文化財に対する御理解の一助になることを期待して序といたします。

平成9年3月

長野県伊那市教育委員会

教育長 保科恭治

例　　言

1. 本書は、平成8年度に実施した県単農道整備事業（ふるさと）小黒地区に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は上伊那地方事務所長の委託により、伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団を編成し、この調査団に事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成8年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　飯塚政美　寺平　宏

◎図版作製者

- 地形実測図　友野良一　飯塚政美
- 土器拓影　友野良一　飯塚政美
- 石器実測図　友野良一　飯塚政美
- 地質柱状図及びテフラ分析表　寺平　宏

◎写真撮影者

- 発掘状況　友野良一　飯塚政美
- 遺物　友野良一　飯塚政美
- 地質撮影　寺平　宏　飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会から委託を受けた市内遺跡発掘調査団がおこなった。
6. 出土遺物、遺構図及び実測図類は伊那市考古資料館に保管してある。

目 次

口 紋

序

例 言

目 次

挿 図 目 次

表 目 次

図 版 目 次

| | |
|---------------------------|------|
| 第Ⅰ章 発掘調査の経過..... | (1) |
| 第1節 発掘調査に至るまでの経緯..... | (1) |
| 第2節 調査の組織..... | (2) |
| 第3節 発掘調査日誌..... | (2) |
| 第Ⅱ章 遺跡の環境..... | (4) |
| 第1節 遺跡の位置..... | (4) |
| 第2節 歴史的環境..... | (4) |
| 第3節 地形及び地質..... | (7) |
| 第Ⅲ章 調　　査..... | (10) |
| 第1節 調査の概要..... | (12) |
| 第2節 遺構と遺物..... | (12) |
| 第3節 先土器時代遺物出土地点周辺の調査..... | (13) |
| 第Ⅳ章 所　　見..... | (16) |

揮 図 目 次

| | |
|---------------------------------|------|
| 第1図 小黒川周辺地域遺跡分布図..... | (6) |
| 第2図 小黒南原遺跡発掘調査地点地質柱状図..... | (7) |
| 第3図 地形及びトレンチ・グリット配置図..... | (10) |
| 第4図 土器拓影..... | (12) |
| 第5図 先土器時代遺物出土地点周辺グリット配置図..... | (13) |
| 第6図 先土器時代遺物出土地点周辺グリット地層断面図..... | (14) |
| 第7図 先土器時代尖頭器実測図..... | (15) |

表 目 次

| | |
|------------------------------|------|
| 第1表 小黒南原遺跡発掘調査地点テフラ分析結果..... | (8) |
| 第2表 先土器時代遺物出土地点周辺遺物一覧表..... | (14) |

図 版 目 次

| |
|---------------------|
| 図版 1 遺跡遠景 |
| 図版 2 遺跡遠景 |
| 図版 3 発掘調査状況 |
| 図版 4 発掘調査状況及び遺物出土状況 |
| 図版 5 出土遺物 |

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回緊急発掘調査の対象となった小黒南原遺跡（伊那市大字伊那西町区小黒原）一帯は畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区に該当しており、平成3年12月発掘調査を実施し、翌年3月調査報告書を刊行している。今回の発掘調査を実施する直接的な動機はふるさと農道整備事業を導入することによっている。本事業の目的としている骨子は次の通りである。「小黒川北部地区は西春近地区的広域農道沿いにある野菜集出荷場への農作物運搬の短絡化ができ、経済性の高い農業経営を図ると共に、地域の活性化を図るためにには本事業の効果は非常に大きい。計画路線は広域農道西春近を起点として大字伊那の畠地帯を終点とする。」

平成7年10月6日、伊那市役所会議室で、長野県教育委員会文化課指導主事、上伊那地方事務所土地改良課職員、伊那市教育委員会社会教育課職員三者で平成8年度分埋蔵文化財保護協議を綿密に実施し、事業の準備、進捗に支障が生じないように万全を期す協力をはかった。

平成8年7月22日付けて、上伊那地方事務所長より県単農道整備事業（ふるさと）小黒地区における小黒南原遺跡発掘調査実施計画書、発掘調査見積書についての提出依頼がある。

平成8年7月30日付けて、伊那市長から上伊那地方事務所長へ小黒南原遺跡発掘調査実施計画書及び発掘調査見積書を提出する。

平成8年8月5日付けて、県単農道整備事業（ふるさと）小黒地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査（小黒南原遺跡）委託契約書を上伊那地方事務所長三浦太家男、伊那市長小坂権男両者間で締結する。

平成8年8月10日付けて、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘の通知について（第57条の3第1項の規定による）を提出する。

平成8年8月13日付けて、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

平成8年8月14日付けて、伊那市長小坂権男と市内遺跡発掘調査団（小黒南原遺跡）団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を取り交わす。

平成8年11月12日付けて、小黒南原遺跡発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛て提出する。

平成8年12月13日付けて発掘調査見積書（変更）を上伊那地方事務所長三浦太家男に提出する。当初経費500万円が130万円に減額補正されることとなった。

平成8年12月13日付けて埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託変更請負契約書を伊那市長と上伊那地方事務所長とで締結を完了する。

平成9年1月9日付で変更委託契約書を伊那市長と小黒南原遺跡発掘調査団長とで結ぶ。
その後、社会教育課では減額補正を3月市議会に上程し、対応処理を実施した。

第2節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に下記のような組織編成を構成し、支障の無いよう万全を期し、
調査のスムーズな進捗を願った。

伊那市教育委員会

委員長 小田切 仁
委員長代理 小坂栄一
委員 岸 敏子
" 小松光男
教育長 保科恭治
教育次長 柚植晃
事務局 新井良二 (社会教育課長)
" 鳥原千恵子 (社会教育課副参事)
" 宮原強 (社会教育課長補佐)
" 飯塚政美 (社会教育係)
" 有賀恵 (")

発掘調査団

団長 友野良一 (日本考古学協会会員)
調査員 飯塚政美 (")
" 寺平宏 (第四紀学会会員)
発掘作業員 大久保富美子 酒井とし子 有賀秀子 城倉三成 小田切守正
松下末春 原公夫 小松孝臣 (敬称略順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成8年9月3日 伊那市西箕輪羽広に建てられている伊那市考古資料館にて発掘器材の整備を行い、発掘調査に備える。午後より発掘地点の草刈りを実施し、畑に散かれていたマルチのビニールを剥ぎ取り、焼却する。

平成8年10月14日 ふるさと農道の幅杭を確認し、それを連結してビニールテープを張り付け、境界線上を明確にした。午前10時頃から雨が降り出したので、作業を終了する。

平成8年10月16日 南北に走る現農道の西側をトレンチ状(第1号トレンチ)に掘り進める

が、アスパラ栽培深耕の為、大部分が擾乱状の溝が明瞭に浮き出ていた。遺物の出土は何もなかった。

平成8年10月17日 昨日掘った第1号トレンチの道を隔てたすぐ東側に南北状の第2号トレンチ掘りを実施する。遺構の検出は何もなかったが、縄文中期土器片が出土した。

平成8年10月18日 昨日と同様のトレンチを南から北へと掘り進めていくが、遺構、遺物の検出は何も無く、作業員一同に落胆の気持が漂っていた。

平成8年10月23日 トレンチ掘りを、現在、東西に走る農道の南側に入れる。この地点で用地西端部を南へ、南へと掘り進めていくと、先土器時代の黒曜石製尖頭器1点が出土。作業員皆んなが大いに喜んだ。

平成8年10月29日 昨日と同じように第3号トレンチ掘りを南側へ、南へと進めて行く。遺構の検出は何もなかったが縄文中期土器が数片出土。第4・5号トレンチ掘りをさらに東側へと進めていくが遺構・遺物の出土は何も無く、道路の全体像がある程度に分かった。

平成8年10月30日 ポイント出土地点周辺に、1辺2m×1辺2mのグリットを10m平方に組む。南から北へA-E、西から東へ1~5と命名。従ってグリット枚数は25カ所となる。

平成8年10月31日 A1、A3、A5のグリットを掘り下げていくと、黒曜石片が出土。

平成8年11月5日 グリット掘りを東側へ、東側へと進めるが、遺物の出土は極めて少量。

平成8年11月6日 10m×10m範囲内でのグリット掘りを終了するが、グリット設定時に期待していた先土器時代の遺物は何も出土しなかった。

平成8年11月7日 10m平方に組んだグリット内の遺物をドットマップし、それを図として作成する。

平成8年11月11日 尖頭器の出たグリット周辺のセクション図を(南北2本 東西2本 合計4本)作り上げる。埋め戻しを開始する。

平成8年11月12日 埋め戻しを完了。全測図の作成。後片付けを終える。

平成9年1月~平成9年3月 遺物の整理、図版の作成、原稿執筆、報告書を印刷所へ送る。

平成9年3月10日 報告書を刊行する。

(飯塚政美)



発掘風景

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

小黒南原遺跡は、長野県伊那市西町区小黒原地籍、小黒川左岸河岸段丘突端面一帯にその範囲を有し、西側で伊勢並遺跡、北側で山の神遺跡にそれぞれ接している。

本遺跡地までの道順はJR飯田線伊那市駅で下車し、駅前の道路を西へ200m位行った地点で四角を左折し、県道西駒ヶ岳線を南へ向かって150m位進むと三叉路があり、ここで右折して坂道を西方へ登る。登りだすと左手途中に天台宗円福寺、右手に荒井神社が鎮座し、静寂のたたずまいを呈し、地域住民の崇拝の中心地となっている。荒井神社前の三叉路を左に曲がると同時に、左手に伊那健康センターの白い建物が目に入り、さらに西へ進むと左手に長野県伊那弥生ヶ丘高等学校、右手に伊那市立伊那中学校の校舎が規則的に建てられている。

伊那中学校の南側がY字路を呈しており、左折すると左手に長野県伊那文化会館、右手に長野県伊那労働者福祉センターの建物がひときわ目立つ。これらの周囲には広い駐車場、運動場、テニスコート、陸上競技場の諸施設が完備されており、スポーツの一大拠点となっている。労働者福祉センターの西側に婦人の家があり、この南側を左折、直進して300m程南へ行くと、小黒川につきあたる。この一帯が小黒南原遺跡の中心地である。

第2節 歴史的環境

小黒川を中心にして、南、北両河岸段丘面に広範囲にわたって存在している遺跡は中央道より東側では19カ所確認されており、これらは1つ、1つの諸特徴を持っている。この一帯は先土器から近世さらに昭和時代に至るまでの各時代にわたる遺跡が存在しており、連絡として人間の営みが実証できることであり、伊那市の歴史をひもとく上で、最も重要な地域の一つに考えられている。

小黒南原遺跡は今回2度目の調査であった。この遺跡と接する伊勢並遺跡は過去5回の発掘調査を実施し、次のような成果を得ている。先土器時代の葉状尖頭器、剝片石器、縄文早期斜縄文土器、格子目押型文、茅山上層式、天神山式。縄文前期初頭木島式、縄文中期五領ヶ台式、井戸尻式、曾利式、弥生中期の土器が出土。平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、青銅製和鏡が発見され、複合遺跡の様相を強く実証してくれている。

赤坂遺跡は過去に2回の発掘調査を行っている。第1回目の調査は昭和48年度中央自動車道開通時で、木島式、曾利式土器片が少量出土。第2回目は平成6年度西部開発事業時で、遺構・遺物の検出は何も無かった。これらから見て、遺物散布地のように思われた。

ますみが丘遺跡は小黒川河岸段丘の最遠地地域にあり、水利便は最悪であった。従って遺物の出土は希薄で、縄文中期土器數片と、同期の石鎌、打製石斧數点の出土を確認しているに過ぎない。上ノ山遺跡は平成6年度夏場に発掘調査を実施し、次のような成果をあげている。遺構としては江戸時代掘立柱址4棟、昭和時代竪穴防空壕2基、昭和時代ゴミ捨場（特に明治時代～昭和時代の磁器が多く量に層になって出土した）。遺物としては縄文早期茅山式土器片、石鎌、近世陶器片、前述したような磁器片を検出した。以前に刊行された発掘調査報告書に井戸尻式土器、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器の出土が報じられている。

山の神遺跡は昭和50年に市水道局の事業に伴って緊急発掘調査を実施したが、遺構・遺物の出土は何も無かった。縄文早期・曾利式、弥生後期等の土器片と、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、中世の天目茶碗が表面採集されている。

狐塚北・狐塚南・八人塚古墳は近接しており、6世紀後半～7世紀前半にかけての後期群集墳である。狐塚南古墳は昭和50年土取り工事によって緊急発掘調査を実施し、直径14m、高さ2.1mの規模を持った円墳であることが判明した。横穴式石室形態で、底面は亀腹状に小黒川産の円形状花崗岩を整然と配列し、これらの接する地点に川砂をきれいに敷き詰めてあった。この調査で出土した遺物は鉄鎌、轡、金環、玉、杏葉、土師器、須恵器であり、特に杏葉3枚はその製作技術が優れている点で、現在、伊都市有形文化財考古資料に指定されている。

狐塚北古墳は横穴式石室を有する円墳であるが、まだ発掘調査の手は入っていないが、盗掘はおそらくうけているのであろう。八人塚古墳は以前に発掘調査が実施され、その成果については塩原伝氏が「考古学雑誌」に発表しており、それについては「伊都市史歴史編」に掲載してある。

平安時代の灰釉陶器移入には東山道が利用され、現在、この地域周辺を通っていたと研究されており話題を投げかけている。この一帯は近世の春日街道通過地点として注目を浴びている。小黒川南岸の遺跡内容については次のように列挙してある。

(飯塚政美)

12 山本田代遺跡 (昭和48年発掘)

(縄文) 中期初頭 後期土器 打石斧 磨石斧

(平安) 竪穴住居6 小竪穴 土師器 須恵器 灰釉陶器 鉄鎌 刀子 鉄具 鉄津

(中世) 土鍋 陶器 (黄瀬戸 天目)

(近世) 陶器 青銅製品

13 城平上遺跡 (昭和47年発掘) (縄文) 中期土器 (平安) 土師器 須恵器

14 城平遺跡 (昭和47年発掘)

(縄文) 竪穴住居1 中期末 後期 晩期土器 磨石 石棒

(平安) 竪穴住居8 土師器 須恵器 灰釉陶器 砧石 刀子

(中世) 地下倉3 小竪穴2 蔡壙4 内耳土器 陶器 (黄瀬戸 天目 備前) 青磁

石臼 砧石 刀子 ピンセット状鉄製品 銃 火打金具 古錢

- 15 宮林遺跡 (縄文) 中期土器 打石斧 烧石
- 16 北条遺跡 (昭和49年発掘)
- (縄文) 中期竪穴住居8 中期土壙4 配石1 勝坂式 加曾利E式 石錠 打石斧 磨石
凹石 磨石斧 刻片石器 砥石 棒状石器 石錐
- (奈良) 竪穴住居1 土師器 須恵器 陶硯
- (平安) 竪穴住居2 土師器 須恵器 灰釉陶器
- 17 山本遺跡 (縄文) 中 後期土器 打石斧 (弥生) 土器
- 18 上島下遺跡 (縄文) 前期土器
- 19 上島遺跡 (昭和48年発掘) (先土器) 刻片
- (縄文) 前期竪穴住居2 小竪穴2 前期土器 打石斧 磨石 敷石 石皿 碓器 横刃形
石器 棒状石器
- (平安) 竪穴住居1 小竪穴1 土師器 須恵器 灰釉陶器



第1図 小糸川周辺地域遺跡分布図 (1 : 20,000)

遺跡の名称

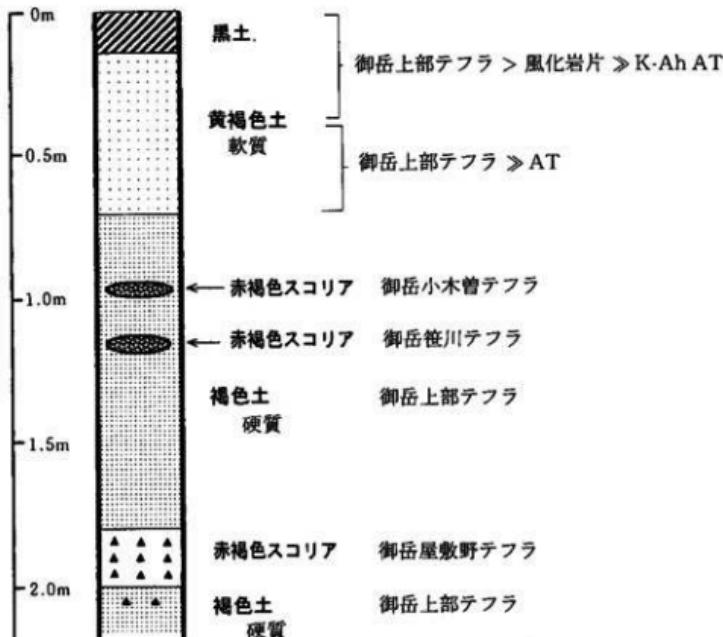
- ①小糸南原 ②伊勢並 ③富士塚 ④上ノ山 ⑤ますみが丘 ⑥狐塚北古墳 ⑦狐塚南古墳
- ⑧八人塚古墳 ⑨山の神 ⑩赤坂 ⑪ウグイス原 ⑫山本田代 ⑬城平上 ⑭城平 ⑮宮林 ⑯北条
- ⑰山本 ⑱上島下 ⑲上島

第3節 地形及び地質

本節を述べるには以前に各種の緊急発掘調査が実施され、それぞれの報告書が刊行されている。その中に必ずといってよい程に、地形・地質の節が設けられ、小黒南原遺跡周辺の地形・地質が綿密な調査に基づいて報告されているので、今回は割愛する。ただし、読者の利便を計るために前述した報告書名を記しておくので御容赦願いたい。

(飯塚政美)

- 烟地帯総合土地改良事業伊那西部地区 小黒南原・伊勢並遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 1992 3刊 上伊那地方事務所 伊那市教育委員会
- 烟地帯総合土地改良事業伊那西部地区 伊勢並遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 1993 3刊 上伊那地方事務所 伊那市教育委員会
- 烟地帯総合土地改良事業伊那西部地区 伊勢並・赤坂遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 1995 3刊 上伊那地方事務所 伊那市教育委員会
- 烟地帯総合土地改良事業伊那西部地区 舟窪西遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 1996 3刊 上伊那地方事務所 伊那市教育委員会



第2図 小黒南原遺跡発掘調査地点地質柱状図

第1表 小黒南原遺跡発掘調査地点テフラ分析結果

| 試料No | 採取場所 | 産 状 | 斑晶量 | 重鉱物斑晶 |
|------|-----------|---------------------|-----|------------------|
| 2883 | 0-15cm | 黒土 | w | op cp mt |
| 2884 | 15-30cm | 黒褐色土 軟質 | w | op cp mt |
| 2885 | 30-40cm | 黄褐色土 軟質 | w | op cp mt |
| 2886 | 40-50cm | 黄褐色土 軟質 | w | op cp mt |
| 2887 | 50-60cm | 黄褐色土 軟質 | w | op cp mt |
| 2888 | 60-70cm | 黄褐色土 やや硬質 | w | op cp mt |
| 2889 | 70-80cm | 褐色土 硬質 | w | op cp mt |
| 2890 | 80-90cm | 褐色土 硬質 | w | op cp mt |
| 2891 | 90-100cm | 褐色土 硬質 赤褐色スコリア点在 | w | op cp mt ho (ol) |
| 2892 | 100-110cm | 褐色土 硬質 赤褐色スコリア点在 | w | op cp mt |
| 2893 | 110-120cm | 褐色土 硬質 赤褐色スコリア点在 | w | op cp mt (ol) |
| 2894 | 120-130cm | 褐色土 硬質 赤褐色スコリア点在 | w | op cp mt ol |
| 2895 | 130-140cm | 褐色土 硬質 | w | op cp mt (ol) ho |
| 2896 | 140-150cm | 褐色土 硬質 | w | op cp mt ho |
| 2897 | 150-160cm | 褐色土 硬質 | w | op cp mt ho |
| 2898 | 160-170cm | 褐色土 硬質 | w | op cp mt ho |
| 2899 | 170-180cm | 褐色土 硬質 | w | op cp mt ho (ol) |
| 2900 | 180-190cm | 褐色土 非常に硬質 赤褐色スコリア含有 | w | op cp mt ho |
| 2901 | 190-200cm | 褐色土 非常に硬質 赤褐色スコリア含有 | w | op cp mt ho (ol) |
| 2902 | 200-210cm | 褐色土 非常に硬質 赤褐色スコリア含有 | w | op cp mt ho (ol) |

凡例

斑晶量 w:well, m:medium, p:poor

重鉱物斑晶 op:斜方輝石 cp:単斜輝石 mt:磁鉄鉱 ho:角閃石 ol:かんらん石

その他の鉱物等 bi:黒雲母 f:長石 qt:石英 β-qt:高溫石英 zi:ジルコン

ga:ざくろ石 ve:バーミキュライト mu:白雲母

伊那市伊那西町区小黒原小黒南原遺跡発掘調査トレンチ断面の堆積物は、約15cmの黒土層の下に、約2mの黄褐色ないし褐色の火山灰土が観察される。火山灰土の間には赤褐色のスコリアが点在する部分や、かなり密集して含まれる部分もある。調査坑断面の分析結果（第1表）から作成した柱状断面のようすを第2図に示した。

0~15cmの黒土には、御岳火山の噴出物と思われる斜方輝石や単斜輝石、また基盤岩が風化して生じた砂粒などを主とし、わずかに鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）と思われる、褐色のバブル型火山ガラスを混入する。このテフラの年代は、およそ7千年前とされている。

15cm~70cmの軟質黄褐色土は、御岳上部テフラの鉱物（斜方輝石・単斜輝石・磁鉄鉱など）に、バブル型火山ガラスが混入する。ガラスはその形態や色などから、姶良Tnテフラ（AT）であり、降灰層厚は40~50cmと考えられる。ATの降灰は、約2.5万年前とされている。

70~180cmの硬質褐色土は、御岳上部テフラの鉱物を主とするが、90~120cmの部分に赤褐色のスコリアが点在している。砂粒の分析結果から、90~100cmの部分は、角閃石とオリビンを含有することによって御岳小木曾テフラ、110~120cmの部分は、角閃石を欠くことにより御岳笹川テフラと同定した。

180~200cmの褐色土は非常に硬質で、そこには赤褐色のスコリアが含まれている。このスコリアは、斜方輝石・単斜輝石・磁鉄鉱などの他に、黒曜石・コーネクス状岩片などを含むことか

| その他の鉱物 岩片等 | 火山ガラスの量 | ガラスの形態他 | 備 考 |
|------------------------|---------|-----------|-------------------------|
| fl qt bi 風化岩片 火山岩片 底化物 | + | bw(br-gl) | 御岳上部テフラ >風化岩片 >K-Ah AT |
| fl qt bi 火山岩片(風化岩片) | ++ | bw(br-gl) | 御岳上部テフラ >風化岩片 >K-Ah AT |
| fl qt bi 火山岩片(風化岩片) | ++ | bw(br-gl) | 御岳上部テフラ >風化岩片 >K-Ah AT |
| fl qt(bi) 火山岩片 | ++ | bw | 御岳上部テフラ >AT |
| fl qt bi 火山岩片 風化岩片 | + | bw | 御岳上部テフラ >AT |
| fl qt bi 火山岩片 風化岩片 | + | bw | 御岳上部テフラ >AT |
| fl qt bi 火山岩片(風化岩片) | | | 御岳上部テフラ >風化岩片 |
| fl qt(bi) 火山岩片(風化岩片) | | | 御岳上部テフラ >風化岩片 |
| fl qt(bi) 火山岩片(コーケス状多) | | | 御岳上部テフラ、御岳小木曾テフラ On-Og? |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ 御岳笠川テフラ On-Ss? |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(bi) 火山岩片 | | | 御岳上部テフラ |
| fl qt(ob) 火山岩片(コーケス状多) | | | 御岳上部テフラ 御岳屋敷野テフラ On-Ys |
| fl qt(ob) 火山岩片(コーケス状多) | | | 御岳上部テフラ 御岳屋敷野テフラ On-Ys |
| fl qt(ob) 火山岩片(コーケス状多) | | | 御岳上部テフラ 御岳屋敷野テフラ On-Ys |

火山ガラスの量 +1%以下 ++1%~10% +++10%以上

火山ガラスの形態他 bw:泡壁型 pm:軽石型 br-gl:褐色ガラス

()はごく僅か含まれるもの

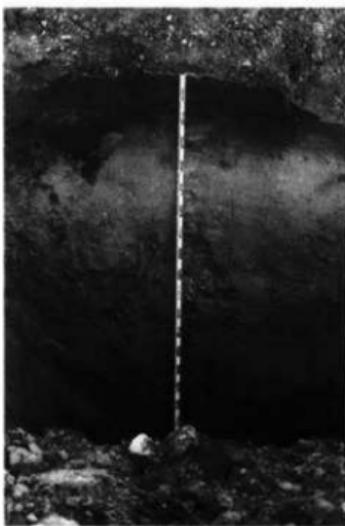
ら、御岳屋敷野テフラに同定される。御岳屋敷野テフラの降灰年代は、直下の御岳三岳テフラ(On-Mt)の年代が約6万年前であることから、およそ5万年前頃であろう。

(寺平 宏)

先土器時代の遺物の出土があったならば、早速に地質学研究者の調査が必要となってくる。つまり、遺物出土層の位置を決定し、さらに、その土壤をサンプリングして、土壤分析を加え、含有物調査を行い、各種の方面から見て、総合的な年代決定をこころみなければならない。

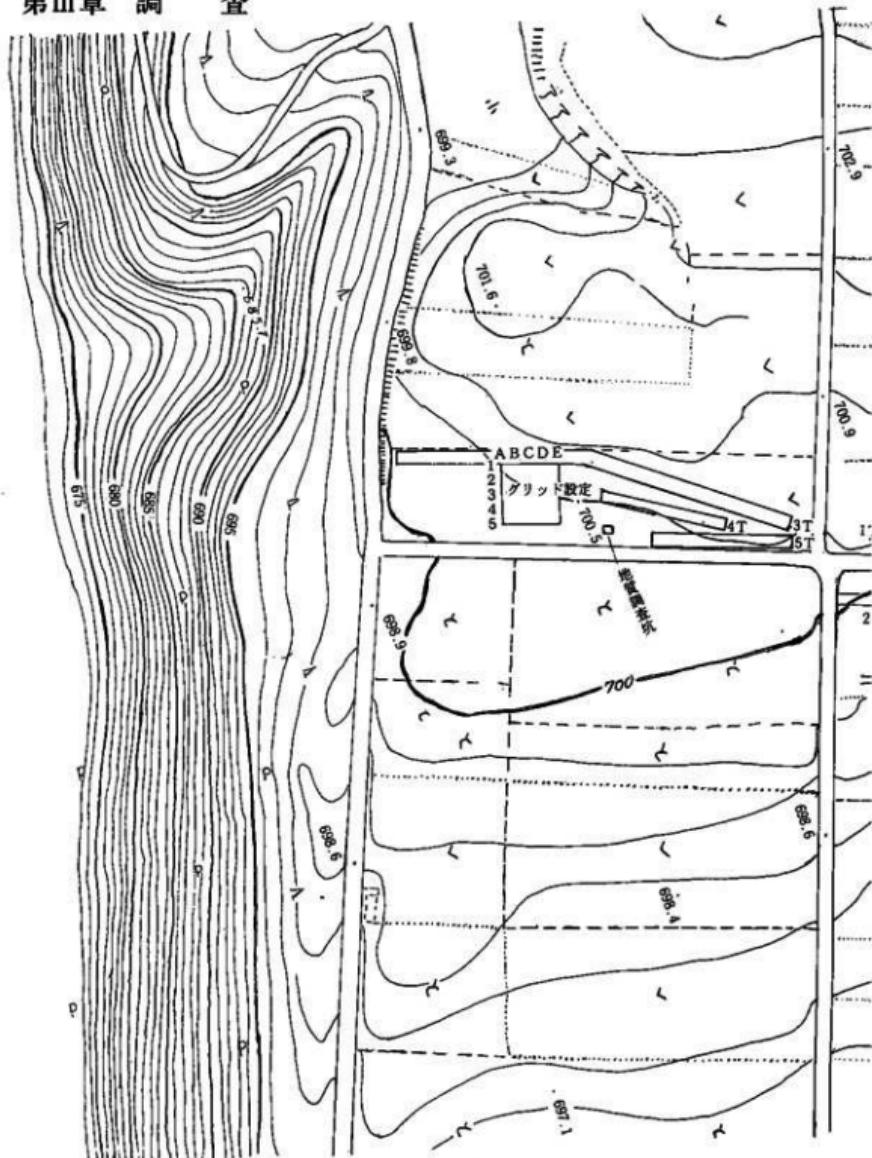
数多くの遺跡発掘調査が行われている中で、先土器時代の遺跡・遺物に直面する機会はほんのわずかであり、一生に一度あるか、ないか程度と思われる。

(飯塚政美)

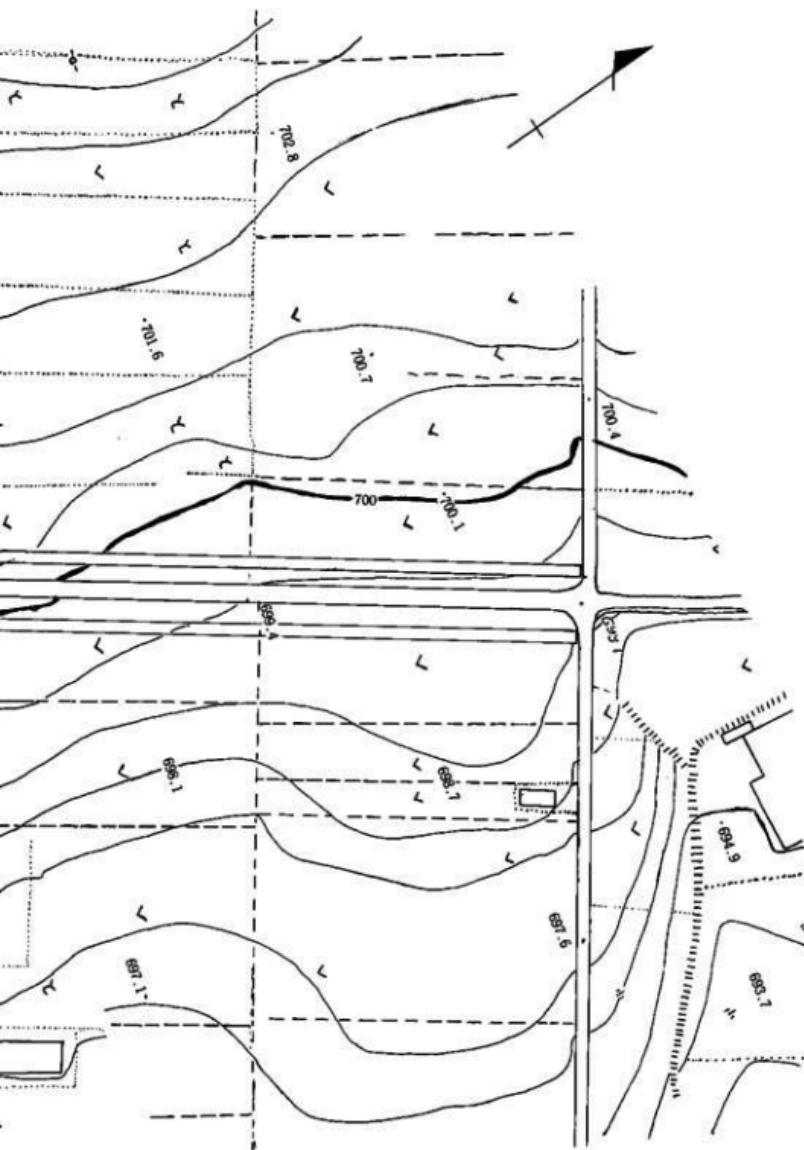


発掘調査地点テフラ

第三章 調査



第3図 地形及びトレンチ・グリッド配置図 (1 : 1,000)



第1節 調査の概要

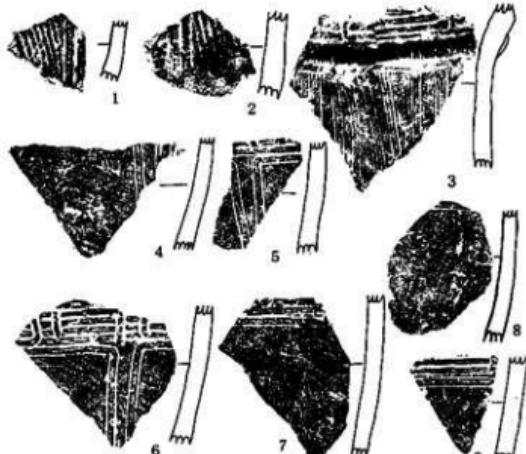
小黒南原遺跡は、現在、畠地、原野、山林に利用され、南側は小黒川左岸河岸段丘に接している。農業振興法の網が厚く掛けられており、その結果、開発化への波及度は鈍く、農道整備事業が導入されているに過ぎない。今回の調査は道路幅に限定された区域だったために当初期待していた程の成果はなかった。

畠地帯中心の耕作土及びアスパラ栽培の深耕によって、テフラ層の深くまで搅乱がゆきわたっていた。このような状態であったために遺物の出土はほんのわずかであり、遺構の検出は全くなかった。

第2節 遺構と遺物

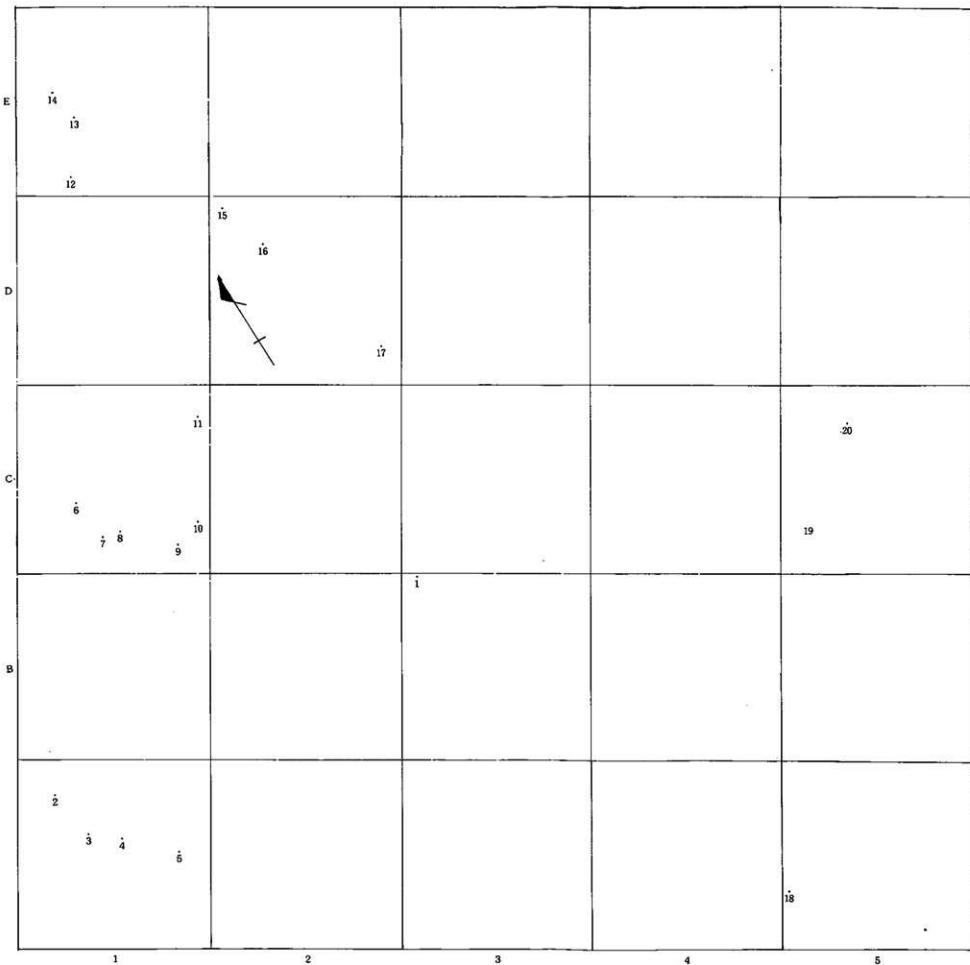
遺構については前節で触れたように全くなかった。遺物については第4図に掲載したものと第3節の中で述べるものに限られている。第4図(1~9)は縄文中期初頭に編年づけられる一派であり、全般的に見て中厚手に属し、色調は(1~2)の赤褐色を除いて、他の土器片全ては薄茶褐色を呈し、焼成は全片とも良好である。(1~2)は第2号トレンチ内、(3~9)は第3号トレンチ内よりそれぞれ出土し、後者は同一個体である。

(1~2)は鋭い竹べらによる沈線文を垂下させ、ところどころに籠目文様を構成している。(3)は文様帶が三分割できる。上部文様帶は幅広ろの沈線を数条ずつ、縦横に組み合わせ、規則性を持つ方形状文様をつくり上げている。中部文様帶は低く、幅広ろの隆帯を横位状に貼り付け、その上に浅目の斜絞文をころがしてある。下部文様帶は鋭い沈線を直線状や斜目状に無雜作に配置してある。その他の破片は上・中・下部文様帶のどこかに連結するものである。上部文様帶に属するもの(5~6·7·9)、下部文様帶に属するものは(4·8)であり、無文帶部が広くゆきわたっていたことがわかる。(飯塚政美)

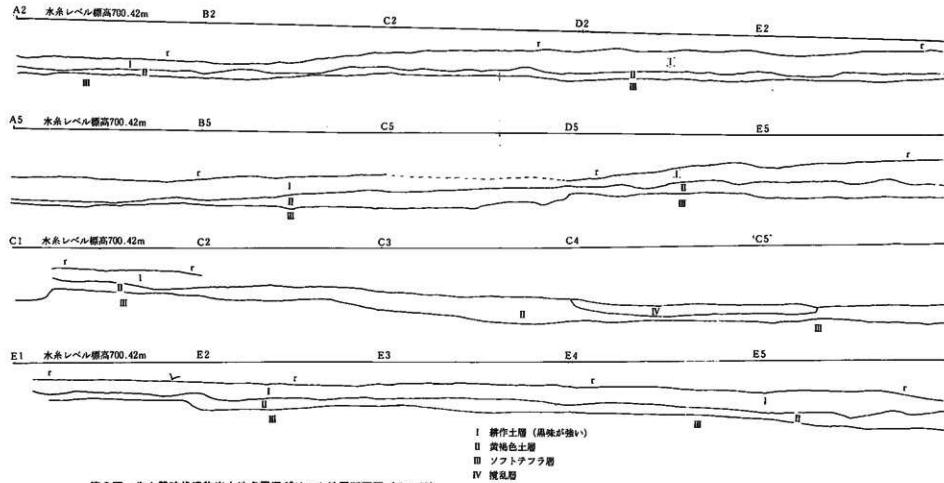


第4図 土器拓影 (1:3)

第3節 先土器時代遺物出土地点周辺の調査



第5図 先土器時代遺物出土地点周辺グリッド配置図 (1 : 40)



第6図 先土器時代遺物出土地点周辺グリット地層断面図（1：40）

第2表 先土器時代遺物出土地点周辺遺物一覽表

| 番号 | 名 称 | 出土 グリット | 出土標高 m | 風 向 | | | | 生 長 度 mm | 古 墳 形 式 | | | | 直 径 m | 底 面 形 式 | 代 用 材 | 地 質 | 実測図No. | 原図No. | 備 考 |
|----|---------|------------|-----------|--------|---|---|---|-------------------|------------------|---|---|---|-------------|------------------|-------------|--------|--------|-------|--------|
| | | | | 北 | 東 | 南 | 西 | | 前 | 中 | 後 | 左 | | | | | | | |
| 1 | 尖頭器片 | B 3 | 669.74m | ○ | | | | | | | | | | | | | 第 7 図 | 原図版 5 | 黒曜石製 |
| 2 | 黒曜石片 | A 1 | 700.05m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | 黒曜石片 | A 1 | 700.05m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 4 | 黒曜石片 | A 4 | 700.02m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 5 | 黒曜石片 | A 1 | 699.85m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | 純文土器片 | C 1 | 700.07m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | 磨板式 |
| 7 | 純文土器片 | C 1 | 700.12m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | 加曾利E式 |
| 8 | 土師器環片 | C 1 | 700.14m | | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| 9 | 純文土器片 | C 1 | 700.12m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | 阿玉台式 |
| 10 | 土師器環片 | C 1 | 699.95m | | | | | | | ○ | | | | | | | | | |
| 11 | 天目茶碗片 | C 1 | 700.06m | | | | | | | | | ○ | | | | | | | 頬戸産 |
| 12 | 黒曜石片 | E 1 | 700.17m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 13 | 緑色岩片 | E 1 | 700.10m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 14 | 打製石斧鋸片 | E 1 | 700.10m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | 硬砂岩 |
| 15 | 鉄納茶碗片 | D 2 | 699.98m | | | | | | | | | ○ | | | | | | | 頬戸産 |
| 16 | 花陶岩(焼石) | D 2 | 699.95m | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 17 | 純文土器片 | D 2 | 700.11m | | | | | | | | | | | | | | | | 加曾利E式 |
| 18 | 石鐵の微片 | A 5 | 699.67m | | ○ | | | | | | | | | | | | | | 黒曜石製 |
| 19 | 天目茶碗片 | C 5 | 699.59m | | | | | | | | | ○ | | | | | | | 頬戸産 |
| 20 | 須彌座茶碗片 | C 5 | 699.81m | | | | | | | | | ○ | | | | | | | 伊万里産 |

第3節 先土器時代遺物出土地点周辺の調査

小黒南原遺跡からは試掘調査の段階で、先土器時代の黒曜石製尖頭器が1点出土した。この時点で、急撃、尖頭器が出土した地点周辺に1辺が10m平方、面積100m²の枠を設定した。さらに、その中を1辺が2m平方、面積4m²のグリットを細かに組んだ。グリット名は南から北へ向けてA、B、C、D、E、西から東へ向かって1、2、3、4、5と名付けて調査を開始した。従って、細分化されたグリットは25カ所になる。

調査方法はグリット毎に掘り進め、遺物の出土があれば、その地点を平面分布と垂直分布の二つの側面から検討を加えた（第5図参照）、さらに、土層堆積を調査するために、第6図のように南北に2本、東西に2本の4面にわたる地層断面図をそれぞれ作成した。100m²に設定した地区内より調査によって出土した遺物を一覧的に第2表にまとめてある。

この表を見て頂ければ一目瞭然であるが、当初、最大目標にしておいた先土器時代の遺物は尖頭器以外何も出土せず、この地における尖頭器の利用方法がある程度理解できると思われる。このことについては第IV章所見の所で綿密に触れるので、ここでは割愛しておくことにしておく。

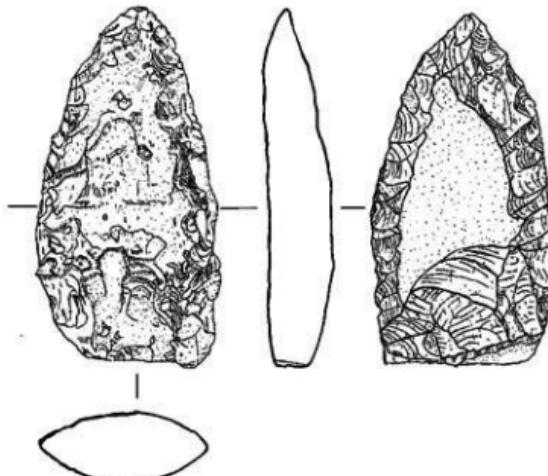
（飯塚政美）

先土器時代の尖頭器（第7図 図版5）

ここで述べる尖頭器は木葉状を呈し、法量は縦の現長6.5cm（下端部は一部欠損）、幅3.2cm、厚さ1.2cmを測る。岩質は良質の黒曜石で、ピカピカと光沢が輝いている。器の表面は中程に鋸ぎのある自然面があり、その周辺は剥離による整形がなされている。

裏面も中程で自然面が占め、その外周は剥離によつて見事な整形がゆきとどいている。その外基部も調整が丹念に行われているのが特徴点の1つである。尖頭器としては小型で、優品である。

（友野良一）



第7図 先土器時代尖頭器実測図（1:1）

第Ⅳ章 所 見

今回の調査は先に述べた通り、極めて限定された範囲内だったために、遺構の検出は全く無く、これに関しての所見を述べるわけにはいかない。ただ、今回の調査地点はかなりの範囲を占めている小黒南原遺跡の空間部地帯に位置していると想定されよう。従って、本章は遺物に関する論考が主となろう。

第4図（3～9）の土器拓影に掲載したのは同一個体の破片であって縄年学的に見て、縄文中期初頭の梨久保式、南関東地方の五領ヶ台式に位置づけられよう。

第7図の搶先形尖頭器は現長6.5cm、最大幅3.2cm、最大厚1.2cmで、木葉状の小型の尖頭器と言えよう。石材は良質な黒曜石で、細長の押圧剝離による調整剝離痕が整然と施されている。単独出土で、他に同時期の伴出遺物が確認されていないので、産出地層の層位などは明確にできない点が多い。ただ、この出土地点はいわゆる新期テフラ層に覆われており、その上に黒色の腐食土（ここでは耕土としてとらえている）を乗せており、耕作中に地表に現れた可能性もある。

しかし、単独で出土した意義は大きく、この尖頭器がたまたま不慮の事故で放棄されたものであると考えられなくもない。単独出土という現実は何か限定された遺跡の意味合いを含んでいる。まず、石器工房址的性格が除外され、生活址的性格も希薄となる。居住空間的性格ならば多少の可能性もありうるが、それにしても、全く同時代の遺物が出土しないことは疑問点多すぎる。

他に狩り場、動物の解体址等の説も考えてみたが、それに伴うナイフ形石器や搔器類の出土が無く、従って、単独出土の基部の欠損品を基にして狩り場と想定するのが最も妥当であろう。狩りをする際に見失ったり、欠損して、脱落した遺物と考える場合は単独出土であっても、なにも不思議ではない。

尖頭器の年代決定は蛤貝火山帯のガラス質面からどのくらいの上層面にあるかによって、その年代決定が成される。今回の場合はおそらく一万五千年前と推定される。

尖頭器出土地点の周辺から出土した近世、近代の陶磁器片は耕作者が日常生活に使用し、何かの折りに堆肥に混じって、それとともに畑へ運搬されたのであろう。

遺跡地一帯は近世、春日街道の通過地点と考えられているが、今回の調査ではこの確認づけはできなかった。

（飯塚政美）

図 版



遺跡地を東側より眺む（上）
遺跡地を西側より眺む（下）

図版2 遺跡遠景



遺跡地を南側より眺む（上）

遺跡地を北側より眺む（下）



第3号トレンチ（上）南側より撮影

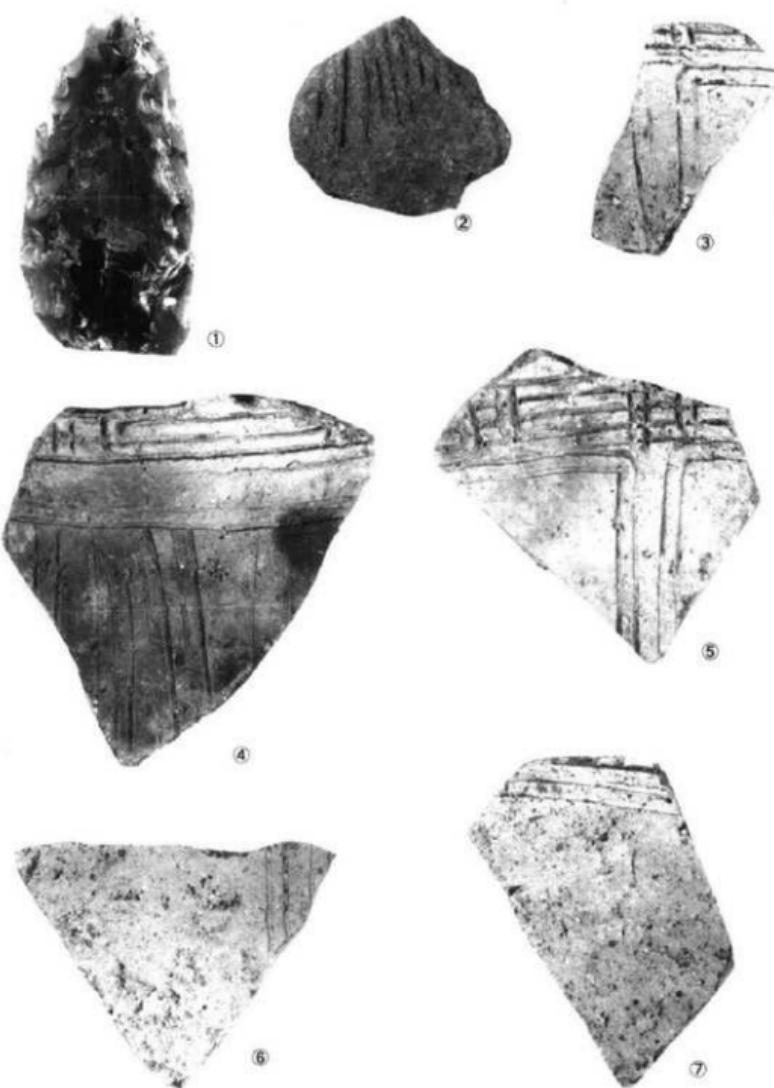
第4・5号トレンチ（下）南側より撮影

図版4 発掘調査状況及び遺物出土状況



第1号トレンチ（左上）南側より 第2号トレンチ（右上）南側より
尖頭器出土状況（左下） 土器出土状況（右下）

図版5 出土遺物



①先土器時代の尖頭器
②～⑦縄文中期初頭土器

報告書抄録

| ふりがな | おぐろみなみはらいせき | | | | | | |
|------------------|--|---------------------------------------|------------|---|---|------------------------|--------------------------------|
| 書名 | 小黒南原遺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 県単農道整備事業(ふるさと)小黒地区 | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | |
| 編著者名 | 友野良一 飯塚政美 | | | | | | |
| 編集機関 | 伊那市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒396 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1997年3月10日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 *** | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| おぐろみなみはら 小黒南原 | ながのけん いなし 長野県伊那市 にしまちくおぐろはら 西町区 小黒原 | 73 | 2376 | | 平成8年 9月3日～ 平成8年 11月12日 | 750 | 県単農道 整備事業 (ふるさと) 小黒地区 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 小黒南原 | | 先土器時代 縄文時代 平安時代 江戸時代 明治時代 | なし | <ul style="list-style-type: none"> ・先土器時代の尖頭器 ・縄文中期時代の土器 ・平安時代の土師器 ・縄文時代の石燃片 ・近世の陶器 ・近代の陶磁器 ・縄文中期時代の打製石斧 | 先土器時代の尖頭器は狩猟者が獲物にねらいをつけ、投げた後に紛失したのであろう。 | | |

小黒南原遺跡

—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

平成9年3月8日 印刷

平成9年3月10日 発行

発行所 上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

印刷所 小松総合印刷所
